



今回は 国語科 の授業改善報告です！

「高等学校学習指導要領の改訂のポイント」では、「主体的・対話的で深い学び」を中心に据え、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力、③学びに向かう力、人間性の3つの柱が挙げられている。国語科では、③「学びに向かう力」を育成し、それを土台に②「思考力、判断力、表現力」を伸ばしていくことを目指し、改善を行っている。

◇ 研究授業

日 時：2019年7月15日(月)5限

対 象：2年5組(38名)

担 当：木村 達宏

科 目：現代文B

単 元：『相手依存の自己規定』鈴木孝夫(東京書籍「精選現代文B」p.50～p.59)

学習活動：①日本人の自我の構造の特色を、実際の事例や欧米人との比較を通して理解する。

②日本人の自我の構造が第三段の第三節で紹介されている場面や現象とどのように関連しているかについて、欧米人の場合と比較しながらまとめる。

[設定意図・詳細]

先に挙げた改訂のポイントにおいて、国語科の改善事項には、

- ・科目の特性に応じた語彙の確実な習得、主張と論拠の関係や推論の仕方など、情報を的確に理解し効果的に表現する力の育成(言語能力の確実な育成)
- ・学習の基盤としての各教科等における言語活動(自らの考えを表現して議論すること、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめることなど)の充実(同上)

が挙げられている。本授業では「議論を通して意見をまとめる」ことによって「主張と論拠の関係」の理解を目指した。対比構造を正確に理解するべく、ある概念について同義の表現や、筆者が挙げた例示にさらに追加できる例はないか、議論を通して考えられるように心がけた。

①日本人の自我の構造の特色を、実際の事例や欧米人との比較を通して理解する。

ワークシート

<p>問一 五十六頁八行目「自己の座標」と同義の語句を同形式段落中から抜き出して示せ。</p>	<p>問二 五十七頁九行目「察しがよい、悪い、……のような表現は概してヨーロッパ語に翻訳しにくい」のはなぜか。八十字以内で答えよ。</p>	<p>問三 五十七頁十六行目「相手の立場でものを考え、自己を拡大して他者を取り込む」という傾向のある日本的な精神風土を、同形式段落中の他の表現に置き換えよ。</p>
-------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------

筆者は、日本人の自己表現を「相対的自己表現」とし位置づけ、欧米人の「絶対的自己表現」と区別して捉えている。本文では、いくつかの具体例を挙げながら両者の相違点を説明しており、それらを確認しながら日本人の「自己表現」の特徴を理解した。その上で、本文に記載されていない例を考える事までできた。

②日本人の自我の構造が第三段の第三節で紹介されている場面や現象とどのように関連しているか、欧米人の場合と比較しながらまとめる。

板書案

他者依存の自己規定（五回目） 鈴木孝夫

- ・日本型の相対的「自己」表現と欧米型の絶対的「自己」表現。
- ↓ 自我の構造の特色「他人志向型の大勢 順応主義」との関係性。
- ・日本型・欧米型の自我の構造には、それぞれにプラスの面とマイナスの面がある。

↓ 相手の正体が不明では正常な人間関係を組めない。

「日本型」自己の座標（「自己の位置づけ」）は、相手との関係を前提とする。

「欧米型」相手が表明しない限り、その気持ちを推し量る心理構造を「持たない」。「察しが良い」「悪い」等の翻訳が困難。

例示……日本人が外国人に日本語を教えている時。
(他に例はないか。)

「対話」は固い自我を持つもの同士が意見や利害を調整するための言語である。

日本人の自我の構造は「固く」ない、「むしろ」「柔らかい」

↓ 相手の自己の立場の原点としてのみ考える拡散的自我構造

↓ 「自己」を拡大して他者を取り込む「構造」

↓ 「対話は日本人には最も異質なものの」「主張」

筆者は「対話」とは日本人にとって最も異質なものであると結論する。この意外な結論に対して、どうしてそのような主張に行き着くのかを、論理の流れを押さえながら理解することを目指した。本文にある「拡散型自我構造」とはどういうものか。同じく「対話」とはどういうものを指しているのかを正確に理解することに努めた。

[授業者のふりかえり]

ペアワークを中心に展開した。初対面の他人と挨拶をする際に、日本型の自己表現を前提としたらどのようなものになるか。欧米型の自己表現を前提とした場合はどうか。それぞれの自己表現の長所と短所にはどのようなものがあるか、といった問いかけを考える中で、筆者の主張の理解を深めた。ただし、すべてのペアが積極的に授業に参加できたとはいえず、より具体的で、生徒の思考を深められる問いかけを授業者自身が練らねばならないと反省した。また、解説の際に本文の記載をただ指摘するのではなく、生徒の読解力を育む工夫を凝らさなければならない。評論文読解の手順を授業者自身が一つの型として確立し、教材が変わっても常にその型を基盤に解説することで、生徒の読解力を向上することに繋がりたい。

◇ ICTの活用について

本年度後期より全教室に設置されたプロジェクターを積極的に活用している。主に人物関係図や、現代人になじみの薄い作中の生活用品、ワークシートと形式をそろえた上で解説を加えたスライドなどを投影している。

生徒の注目を引き、理解を助けることには一定の効果があると実感しているが、より「双方向的」で「対話的」な授業を展開するにはさらなる工夫が必要である。教材研究の一環として、ICT機器をいかに活用するか、今後も研究を深めたい。

授業風景

